

慈光平廃寺跡(比企郡小川町)

1 まちづくりの歴史

武蔵の小京都と称される小川町は、その風景や町のたたずまいが京都に似ているばかりでなく、その文化・産業の成り立ちにも深いかわりを持っています。天台別院慈光寺(現ときがわ町)は、唐の高僧鑑真の弟子釈道忠が奈良時代末期から平安時代初期に開山したと伝えられており、この地域に移住した高麗からの渡来人による製紙、絹織物、建具などの諸産業を開花させ、1300年に及ぶ文化の源泉となりました。

この地域に人が住みついたのは今から約1万年以上前の旧石器時代ですが、人々の生活の痕跡が確認できるのは縄文時代で、八幡台遺跡や平松台遺跡などの集落が出現しております。古墳時代後半になると穴八幡古墳に代表される古墳群から豪族がこの地に存在したことを物語っています。奈良時代以降に遺跡の数は増大し、その代表が慈光平^{じこうだいらはいじ}廃寺です。ときがわ町の慈光寺に先行する山岳寺院として、関東に未だ例のない大規模なものであったことが発掘調査によって明らかになりました。

鎌倉時代には政治の中心地鎌倉へ通じる鎌倉街道^{かみつみち}上道が町域を貫通しており、人々の交流や物資輸送に重要な役割を果たしました。日本で最初の『万葉集註釈書』を著した天台宗僧侶の仙覚^{せんがくりっし}律師もこの道をたどって鎌倉からこの地に往来し、比企地方^{ましろじょう}麻師宇郷において文永6年(1269)この偉業をなしとげました。

インターネットより

遺跡番号	3500-098-000
遺跡名	慈光平遺跡
よみがな	じこうだいらいせき
所在地	比企郡小川町靱負
種別	寺院跡
時代	平安
立地	山林
遺構概要	
遺物概要	須恵器片-3点、土師器片-3点、瓦片(須恵質)-1点

インターネットより

慈光平廃寺は慈光寺に先行する山岳寺院！

II 山の寺

平安時代になると、比叡山延暦寺や高野山金剛峯寺のように、地方でも人里離れた山の中に寺院（山林寺院）が建立されるようになった。

その一因として、光仁・桓武朝における山中修行僧の優遇策があげられる。この政策により山林修行が活発化し、山林寺院が急速に増加したといわれている。

近年、埼玉県や群馬県でも山林寺院が発見されており、8世紀後半頃に活動し、民衆から深く崇拝されたと伝えられる道忠や道忠教団との関連性が指摘されている。

慈光平麿寺 じこうたいら 平安時代 埼玉県比企郡小川町所在

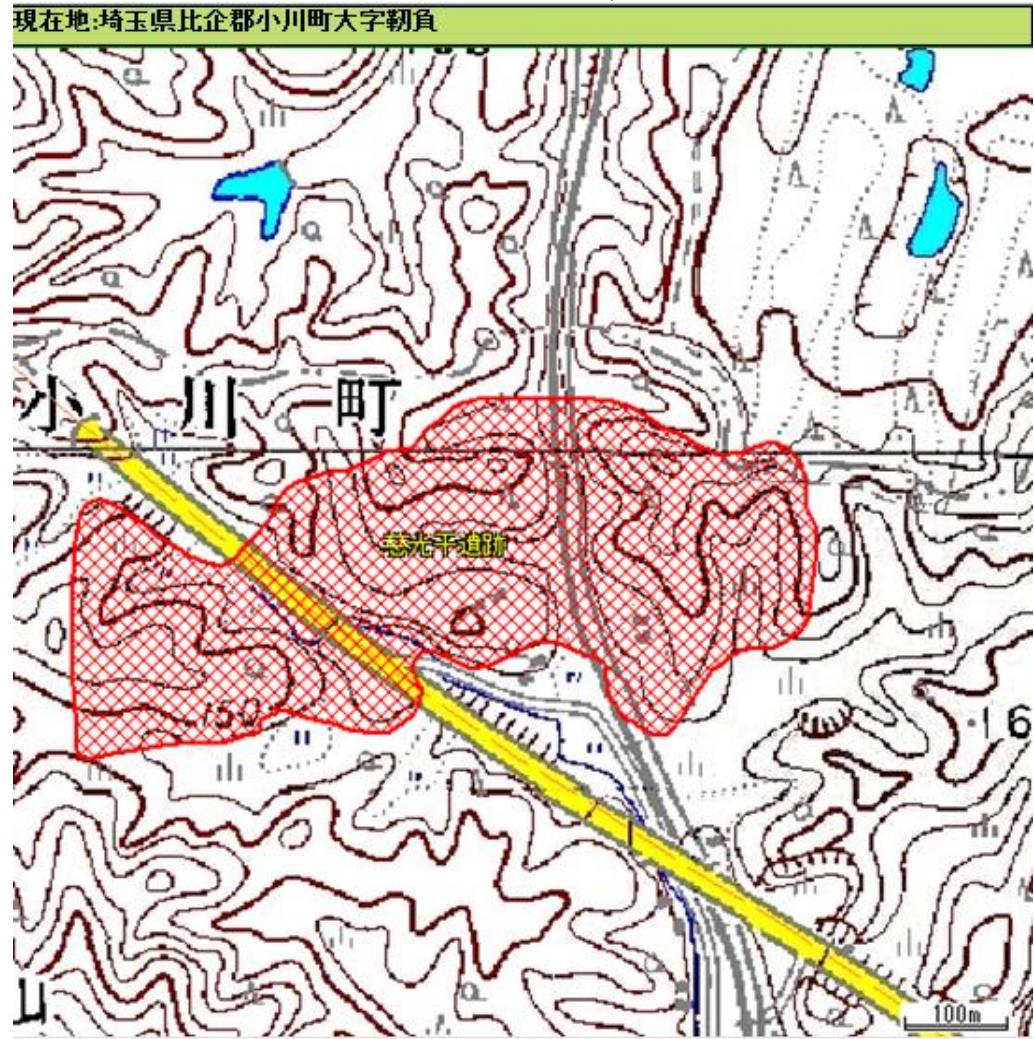
慈光平麿寺は山地に立地し、東西約820m・南北約270mの寺域をもつ。9世紀後半から次々と斜面を削って大小の平場が造られ、100か所以上で平場が確認されている。

試掘調査により、大規模な平場からは礎石をもつ東西4間（8m）・南北4間（8m）の建物跡が見つかり、風鐸や釘、灯明皿、瓦塔の破片も出土した。その結果、ここには堂が建てられ、内部に仏像と瓦塔が安置されていたと想定されている。

「埼玉の古代寺院」より

山林寺院としての慈光平麿寺は道忠や道忠教団との関連性が！

東武東上線
↓



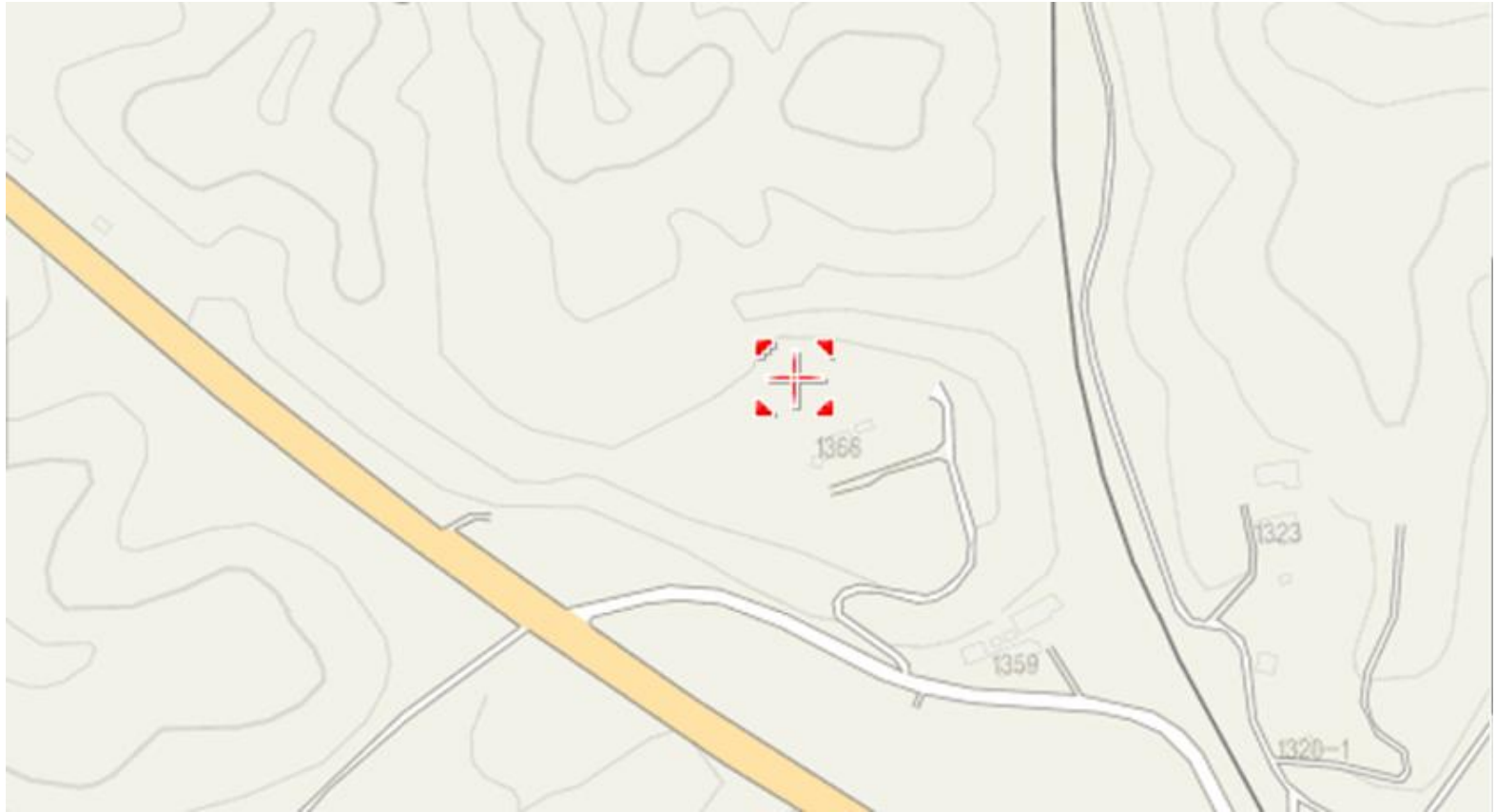
↑
県道254号線

インターネットより

東武東上線の線路の両脇及び県道254号線の両脇に点在する







東武東上線



慈光平廃寺概略図 小川町教育委員会提供

↑
県道254号線

「埼玉の古代寺院」より



慈光平廃寺11平場の基壇南東コーナー

小川町教育委員会写真提供

4間×4間の堂が建っていたと想定される平場。基壇や礎石が確認された。

この東武東上線の両脇に慈光平廃寺は点在する





線路の左手



慈光平廃寺は左手に見える県道254号線の向こう側にまで広がる



県道254号線から東武東上線方向を見る(前方は調査隊の車)



その左手方向を見る



県道254号線の向こう側を見る



トピック 道忠と慈光寺

道忠は、天平宝字5年（761）に下野薬師寺に戒壇が置かれるに伴い、授戒に必要な僧侶の一員として東国に下向したと考えられている人物である。

鑑真和上の高弟で「受戒第一の弟子」と称された道忠だが、出自をはじめ詳細については不明な点も多い。武蔵国出身との説もある。

人々から「東国の化主」また「菩薩」と崇拜されたと伝えられ、行基のように民衆に対し布教を行っていた人物であろうと考えられている。

道忠は武蔵国の慈光寺、上野国の緑野寺の開基で、下野国大慈寺の二祖として、8世紀後半を中心に道忠教団を形成し、この地域を拠点に活動したとされる。最澄とも深い親交があり、初期天台座主には円澄をはじめ、道忠の門弟たちが名を連ねている。

慈光寺の開基には諸説があるが、平安時代にさかのぼる宝物もあり、道忠と慈光寺の深い縁を偲ぶことができる。

道忠は慈光寺の開基で道忠教団を形成し、8世紀後半を中心に武蔵国、上野国、下野国という地域を拠点に活動した！

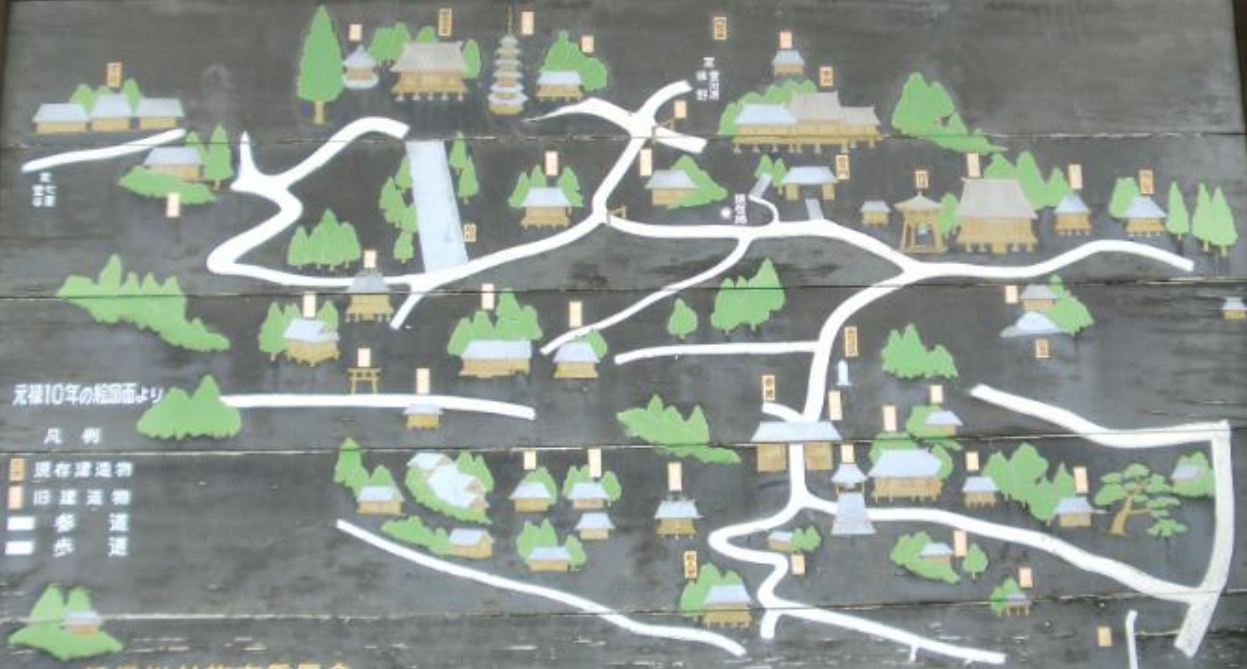
慈光寺アプローチ





ふるさと 郷土 元圃橋

都幾山慈光寺案内図(県指定重要遺跡)



元禄10年の絵図面より

- 凡例
- 現在遺蹟物
 - 旧蹟遺物
 - 歩道
 - 歩道

都幾川村教育委員会
都幾川村観光協会

観音堂へ向かう





こちらは別ルートで観音堂へ行ける



前方に観音堂が見えてくる



慈光寺觀音堂/1803年再建



平成5年～平成9年に改修・修復が行われているが安田工務店が携わっている





都幾川村指定文化財

慈光寺観音堂

一棟

江戸時代・享和三年(一八〇三)
平成元年四月十一日指定
平成九年四月十二日移建

観音三十三観音堂第九番札所都幾川山慈光寺観音堂の本尊は本造千手観音立像です。寺伝によれば、天武天皇二年(六七三)に僧慈訓により創建されたといわれます。

現在の観音堂は、享和三年(一八〇三)に九十七世義然が再建したものです。歳月の中で老朽化は進み軒梁への継承が心配されてきました。そのため修復事業に着手し、村内外からの寄付金、県・村などの補助金と慈光寺により平成五年(一九九四)から四か年をかけた。本尊の解体修理や葺きから銅板葺きへの改修、堂内外の修復と周辺整備を行いました。

観音堂は、入母屋造・銅板葺きの屋根、軒は二重警垂木とし、本尊を安置する内陣の柱は円柱で三間(約五・四メートル)四面です。前方に十二尺三寸(約三・七メートル)出して礼拝の間(外陣)を設け、その前方には一間の軒唐破風付きの向拝を出しています。外陣は吹き放しで、屋物のまま昇殿できる様式は札所建築の特徴でもあります。さらに細部を見ると、柱ごとに彫刻木鼻をつけ、虹梁に細かい文様の彫刻または彫刻を施し、その上は彫刻欄間で飾っています。内陣は格天井とし虹梁くしの文様を画き、来迎柱には随彩色が施されています。なお、外陣に千手観音の眷属である風神・雷神をはじめ二十八部衆の欄間彫刻があることは特徴でもあります。

本尊千手観音立像は秘仏ですが、毎年四月第二日曜日と十七日に厨子が開かれ拝観することができます。この御開帳日には多くの信者が登山し、盛大に護摩法要が行われ賑わいます。また季節を通じて全国から多くの迎礼者の参詣が絶えません。



室内には庵焼した山内諸堂から本造十一面観音立像・木造毘沙門天立像が合祀され、外陣には寶鏡盧舎者坐像、その天井には伝説の「夜叉らしの名馬」が安置されています。

埼玉県指定文化財

本尊 本造千手観音立像
像高 二七〇センチメートル
頭部 室町時代・天文十八年(一五四九)制作
体部 江戸時代・享和二年(一八〇二)制作

平成十二年十二月

都幾川村教育委員会

都幾川村指定文化財

慈光寺観音堂

一棟

江戸時代・享和三年(一八〇三)
平成元年四月十一日指定
平成九年四月十二日修復

坂東三十三観音霊場第九番札所都幾山慈光寺観音堂の本尊は木造千手観音立像です。寺伝によれば、天武天皇二年(六七三)に僧慈訓により創建されたといわれます。

現在の観音堂は、享和三年(一八〇三)に九十七世義然が再建したものです。歳月の中で老朽化は進み将来への継承が心配されていきました。そのため修復事業に着手し、村内外からの寄付金、県・村などの補助金と慈光寺により平成五年度から四か年をかけ、本尊の解体修理や茅葺きから銅板葺きへの改修、堂内外の修復と周辺整備を行いました。

観音堂は、入母屋造・銅板葺きの屋根、軒は二重繁垂木とし、本尊を安置する内陣の柱は円柱で三間(約五・四メートル)四面です。前方に十二尺三寸(約三・七メートル)出して礼拝の間(外陣)を設け、その前方には一間の軒唐破風付きの向拝を出しています。外陣は吹き放しで、履物のまま昇殿できる様式は札所建築の特徴でもあります。さらに細部を見ると、柱ごとに彫刻木鼻をつけ、虹梁に細かい文様の地彫または彫刻を施し、その上は彫刻欄間で飾っています。内陣は格天井とし紋尽くしの文様を画き、来迎柱には極彩色が施されています。なお、外陣に千手観音の眷属である風神・雷神をはじめ二十八部衆の欄間彫刻があることは特徴でもあります。

本尊千手観音立像は秘仏ですが、毎年四月第二日曜日と十七日に厨子が開かれ拝観することができます。この御開帳日には多くの信者が登山し、盛大に護摩法要が行われ賑わいます。また季節を通じ全国から多くの巡礼者の参詣が絶えません。

堂内には廃絶した山内諸堂から木造十
一面観音立像・木造毘沙門天立像が合祀
され、外陣には賓頭盧尊者坐像、その天
井には伝説の「夜荒らしの名馬」が安置
されています。

埼玉県指定文化財

本尊 木造千手観音立像

像高 二七〇センチメートル

頭部 室町時代・天文十八年(一五四九)制作
体部 江戸時代・享和二年(一八〇二)制作



平成十二年十二月

都幾川村教育委員会

観音堂の大改修

坂東観音の第九番札所として
八百年以上前から大勢の信仰深
い参拝者をお迎えして参りまし
た観音堂（村指定文化財・文化
七年一〇一八〇一再建）は、こ
い年月を経て傷みが激しく、こ
のままでは本尊十一面千手千
眼観世音（県指定文化財・室町
時代前半造立）の保存も、誠
に心許無い現状です。

そこでこの度、古い様式・枝
法により、材料を出来るだけ残
しながら、御本尊を耐火施設の
中に安置し、また屋根を銅板葺
にするなどして、永く後世に伝
えるべく大改修を発願いたしました。
三年にわたる工期と、一億二
千万円余りの費用を要するため
皆様の格別のご理解・ご法援を
賜り、銅板等のご寄進を懇願申
し上げます。

平成五癸酉五月

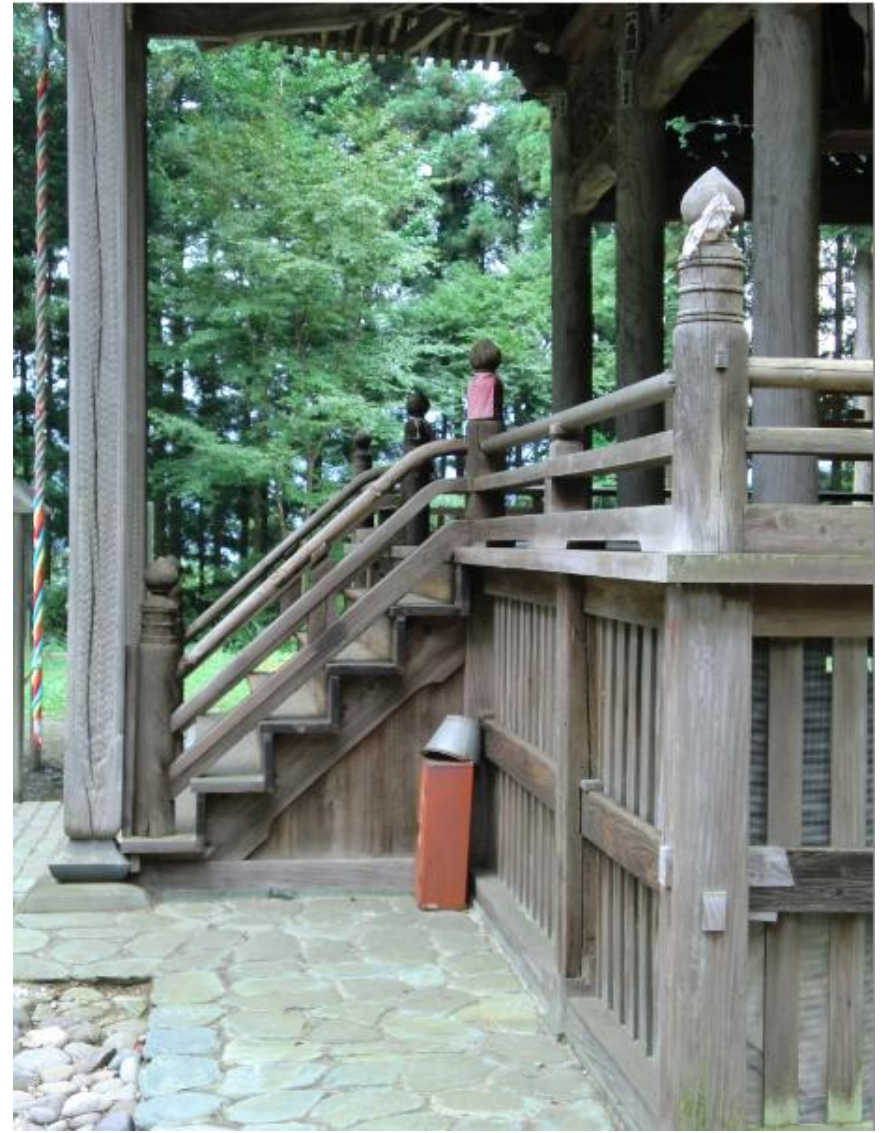
合掌

都幾山 慈光寺

百七世明了敬白







細かい文様の地彫または彫刻が施された虹梁やその上の彫刻欄間、そして伝説の「夜荒らしの名馬」がある







左手には賓頭蘆尊者坐像(びんづるそんじゃざう)が置かれている





外陣部分







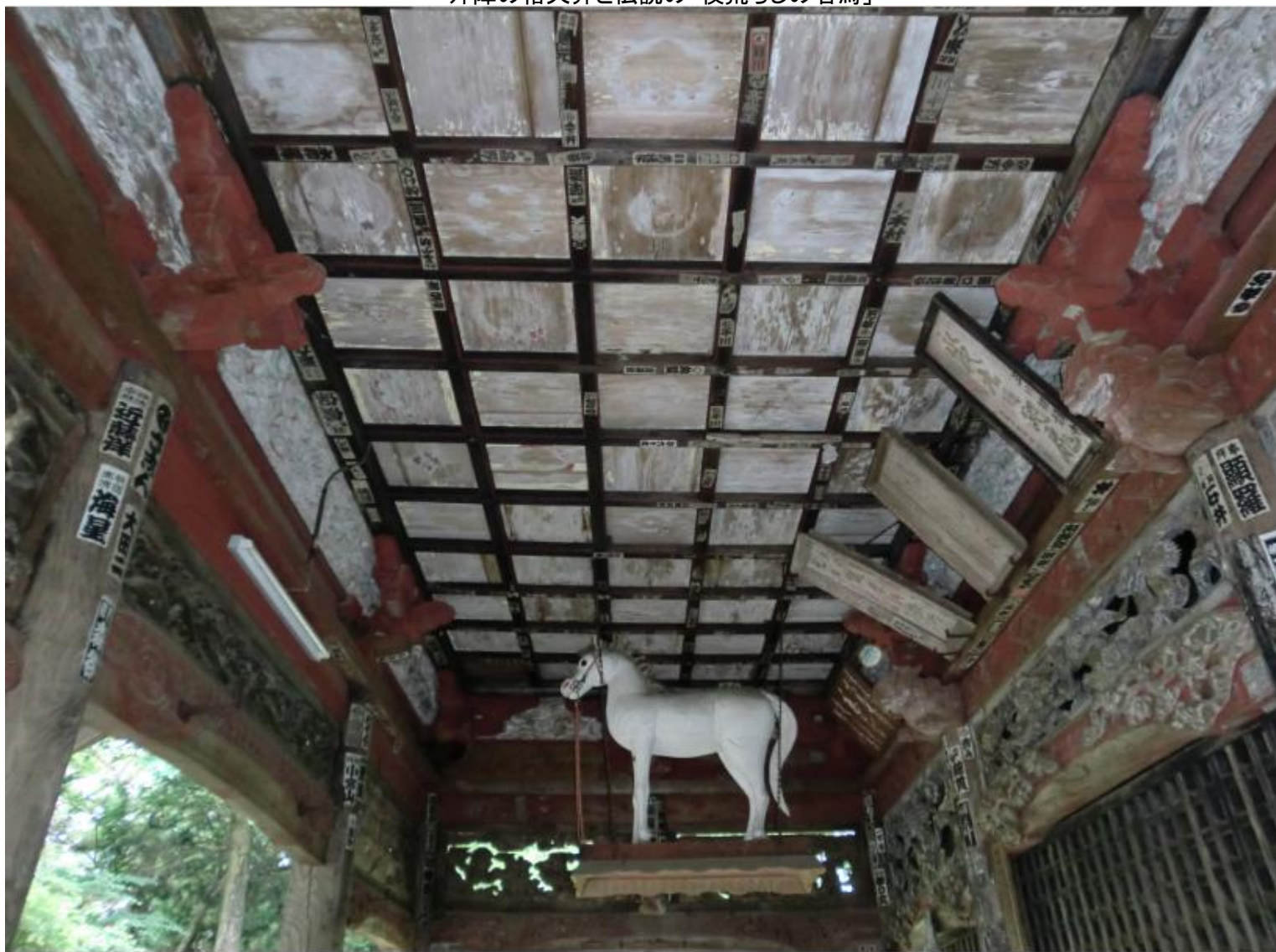


外陣は吹き放しで履物のまま昇殿できる様式となっており、札所建築の特徴という





外陣の格天井と伝説の「夜荒らしの名馬」





向拝の柱の文様





手水舎



板石塔婆



宝篋印塔(中央)



石造層塔



般若心經堂





国宝の法華経一品経 阿弥陀経 般若心経三十三巻のコピー版が置かれている





如意輪觀音



如意輪観音

江戸時代

如意輪観音は、観自在菩薩が、説法する姿を示現したもので、如意宝珠と輪宝をもって衆生を救い願いをかなえる。如意宝珠は、濁水の浄化・衆生に福德を与え、輪宝は悪を破砕・正法の弘通を意味する。

この観音は江戸中期ころから、民間に取り入れられ特に女人信仰が盛んとなり、村々に集落ごとに、このような如意輪観音が、祀られ、二十二夜さまの本尊として残っている。

宝珠と蓮華の代りに、赤子抱いている珍しい悲母観音である。娯楽の少ない昔は、月の二十二日の夜この観音さまの前に女衆が、供物や食べ物を持ち寄り、喜びや悲しみを語り尽くしたという。

この如意輪観音は、地元の雲河原村大字小戸々（現在の都幾川村大字雲河原字小戸々）産出の小戸々石を彫刻したものである。△台石の左右に「寛政八丙辰載」孟冬吉祥日（一七九六）當邑講中善男女 発願主 浄土院 浄恵と造立年月日が刻されている。元は浄土院念佛堂跡にあったものである。

合掌

平成五癸酉十二月（一九九三）

都幾山 慈光寺

板石塔婆/鎌倉時代



弘長二年弥陀一尊種子板碑

鎌倉時代

この青石板碑は、左衛門尉行直(須黒氏)が、弘長二年三月(一二六二)に慈光寺山内に造立したものです。重忠・秩父六良と追刻されていますが、元久二年六月(一二〇五)に討死した畠山重忠・重保父子を供養されたものと思われます。中央に「観無量寿経」の偈がある。

光明遍照 光明はあまねく
 十方世界 十方世界を照らし
 念佛衆生 念佛する衆生を
 攝取不捨 攝取して捨てず

いつのころからか折損倒壊して放置されているのを惜んだ識者の手によって、明治十二年十月(一八七九)に補接されて、その次第を刻した記念碑「修建畠山重忠君断碑記」と共に浄土院境内に移されました。その後再び折損したので貴重な文化財が散逸してはと、宝蔵軒下に大切に保管されていました。

このたび、檀主渡瀬全平氏の佛縁により、板碑と同じ石質の小川町下里産の緑泥片岩(高さ二メートル、幅〇・六、厚さ〇・二)を用い象嵌仕上げの手法をもって、復元されたものです。

合掌

平成五年癸酉五月(一九九三)

天台別院一乘法華院
 都幾山 慈光寺



重忠
 光明遍照
 十方世界
 念佛衆生
 攝取不捨

左衛門尉
 秩父六良

弘長二年 壬戌三月 日敬白
 平 行直

畠山重忠・重保父子を供養する碑とのこと



←重忠



天台宗慈光寺

慈光寺・寺務所
受納經宝印
付拝観浄土院霊巖
→

宝物殿/ここに国宝の法華経一品経 阿弥陀経 般若心経三十三巻の本物が展示されている





申八梵王(さるはちぼんのう)



申さる
八はち
梵ぼん
王のう

江戸時代

猿は、古くから山の神、もしくは山の神の使いとして、信仰されています。山に出入する人たちが、この石像を「お猿さん」とか、「申八梵王」と呼んで信仰し、親しまれてきました。

これは、地元、雲河原村（現在の都幾川村大字雲河原）産出のことと石を彫刻したものである。

横に「天明六年丙午九月十九日」（一七八六）の刻字がある。この年、江戸幕府老中田沼意次が失脚している。天明三年に浅間山噴火があり、天明の大飢饉の最中で、各地に一揆や打ち壊しが続発して、幕藩体制を揺るがしはじめたころである。

山村の無名の石工は、なにかを祈りつつこの軽妙洒脱な御幣を持つお猿さんを彫ったと思われます。

平成五年十月

都幾山 慈光寺

弘法大師筆 隅寺心經



弘法大師筆 隅寺心経

奈良時代 個人蔵

隅寺とは、奈良の海龍王寺のこと。いつの時から同寺より多くの心経が出現した。そこで若き空海(七七四―八三五)が、千卷心経を発願した故事から、一括してこれを弘法大師筆の隅寺心経として崇拜されてきた。経題の下に貼ってあるのは江戸時代の鑑定家「古筆家」が空海の書とした極札。だが、同類の一卷に「天平勝宝七年料」(七五五)と奥書があり、その頃のものだとされる。筆者も当然複数だが、その筆蹟は極めて優れ、あくまで謹厳、整正、まことに写経の龜鑑となすにふさわしい。日本筆頭の書人・空海を比定するのも、むべなるものがある。

本書の結体はあくまで緊密で、一毫の揺きもない。それは、いみじくも筆者の祈りの心に微塵の曇のないことを端的としている。

隅寺心経の中でも、本書は天平写経の名品・光明皇后発願の一切経「五月一日経」に比肩する傑作である。

解説・撮影 飯島太千雄

(「般若心経秀華」講談社刊より)

平成三年五月

紺紙金字一字宝塔心經



紺紙金字一字宝塔心經

平安時代後期 唐招提寺藏

紺紙に銀泥で宝塔を刷り、金泥で書写するが、なかなかの能書で、和様經のよき範となろう。宝塔・書風・異体字からして平安末期の書写と思う。當時、法華經の一品經に阿彌陀經と心經を加えた願經が盛行したので、その一具と考えられるが、精査すると宝塔が木版刷りであり、これにより、本書は心經を十卷または百卷、五百巻を一具とした願經であった可能性もでてきた。鎌倉時代以降に金泥で嚴重な莊嚴を四圍に加えていることからして、高名な貴紳の題經であったのだろう。日本では、平安時代後期に法華經信仰が隆盛し、こうした一字を法塔や蓮台の中に書く裝嚴經がかなり書写されたが、心經の遺例は管見に及ばない。また、尾題の後に法華經方便品の一節を加えている点も稀有の例である。

解説・撮影 飯島 太千雄

〔般若心經秀華〕 講談社刊より

慈光寺を創建した道忠和尚は、この心經を所藏される唐招提寺の開山、鑿眞和上(六八一七三)の高弟であります。鑿眞和上は、来日のため東支那海を渡らんとして、五度の海難漂流に遭遇され、幾多の艱難辛苦の中に失明されても、初志をまげず、十一年後の天平勝宝五年(七五三)ようよう日本上陸を果されました。和上は、東大寺に戒壇を設け、律宗を興すなど、佛法興隆に尽されると共に、たずさえてきた佛像、經典と深い学殖は、天平文化に多大な影響を与えました。

平成三年(一九九一)八月、慈光寺百七世明了和尚は、鑿眞和上の遺徳を敬慕し、一世道忠和尚との佛縁浅からぬを深謝して、これと同じ金字一字宝塔心經陶板を、唐招提寺に献上致しました。

平成三年八月

四足門



本坊







境内側より四足門を見る



鐘楼





この木は多羅葉(たらよう)/埼玉県指定天然記念物



多羅葉(たらよう)

埼玉県指定天然記念物

モチノキ科の常緑喬木で幹回り
二七メートル、高さ一八メートル
葉の表皮に棒などで字が書ける
ので「郵便葉書」の語源となる。
慈覚大師円仁七九四(八六四)が
天長年間に植えられたと言われる。

昭和六十三年(一九八八)四
月七日の降雪によって、老木化
していた枝が折れ、幹の内部が
腐っていたので、枯枝を除去し、
枝の高さを揃え、木の腐爛
を除くため幹巻をし、ウロの中
に垂れ下っていた根を生かすた
めに鹿沼土と共に施肥などの肥
培管理をしたので、自然に生き
る生命力の尊い姿を見せている。
補助金の内訳 県四十五万円、
村二万五千円、所有者負担二
万五千円、合計九〇万円

二五万四千円

破体心経



空海書 破体心經

平安時代・弘仁十二年(八二一)

広隆寺藏

空海(七七四—八三五)は、通行の楷・行・草の各体に傑出するのみならず、渡唐して古文・篆隸・雜體と多様な書法を身につけた。この書は、梵字を書くための木筆という、固い刷毛状の筆を用いている。楷・行・草に隸書や章草しょうそうと呼ぶ特殊な書体を混え、しかも梵字の書法で揮毫している。いかにも天才・空海ならではの破体表現により、密教の神秘性と曼荼羅的世界をいかに表わしている。『般若心經秘鍵』を著し、密教としての心經を説いた空海ならではある。悠久三千年の書の歴史にあって、書で宗教を表現し得たのは、一人空海のみである。

解説 飯島 太千雄

(『般若心經秀華』 講談社刊より)

平成四年五月

良寛書 楷書心經



良寛書楷書心経

江戸時代 個人蔵

良寛(一七五八〜一八三二)は、ある最も日本的な心を書表現として完成してしまった人だ。だから良寛の心経は、日本人の心経に対する心と、美学を端的に表わしていると言える。この書の内に孕んだ空間が、そのまま外なる空間となる様は、法悦の境であり、心経を唱える人における、「空」や「無明」の知覚との相関に等しく思える。

本書では、「書く」ことの意識から脱却した、書法を超越した良寛の書と、悟りに達した良寛が端座している。

越後に戻った良寛の狂おしいまでの書法猛習を、単なる芸術志向や自己顕示欲の表われと律して良いのだろうか。

想うに良寛は、この書法の猛習によって、備中玉島・円通寺での永く厳しい只管打座しかんたぎの禅定ぜんじょうでも得られなかった、真の悟道に達したのではないか。

彼は、ひたぶる書作に邁進し、書によって解脱を期した。良寛は、終にそれを果たし、その超越の書をこうして永遠にすることができた。

解説 飯島 太千雄

(「般若心経秀華」 講談社刊より)

平成四年五月

この銅鐘は国の重要文化財/鎌倉時代



国指定重要文化財

寛元三年銘

銅

鐘

一口

鎌倉時代・寛元三年（一二四五）
昭和二十五年八月二十九日指定

この鐘は、鎌倉時代の寛元三年（一二四五）五月十八日に金朝が頼王となつて東国の
名工「物部重光」が鑄造し、應光寺に奉納した銅製の梵鐘です。
鐘の表面（池の間）には陽鑄による銘文が次のようにあります。

池の間第一区銘文

〔奉治鑄 六尺椀鐘一口〕

天台別院應光寺

大勧進通照全明主

善知識入唐沙門中

大工物部重光

寛元三年己五月十八日

頼王権律師法橋上人住持

池の間第四区銘文

〔銅一千貳百斤〕

この銘文によると、鎌倉時代に隆盛を極めていた應光寺が「天台別院」であつたこ
と、後に鎌倉大仏や鎌倉建長寺の梵鐘（国宝）の製作で知られた「物部重光」が鑄造し
たこと、臨濟禅を日本に伝えた金西の弟子で、靈山院や群馬県尾島町世良田の長栄寺
を開山した「宗朝」が頼王として奉納したことがわかります。また、「銅一千貳百斤」
（約七二〇キログラム）とあり、原料の使用量がわかります。

この鐘は総高一五〇センチ、口径八八センチで、重量は七〇九キログラムあります。
年代のわかる梵鐘では埼玉県内最古であり、鎌倉時代から南北朝時代にかけて関東で
活躍した物部姓錫物師の研究や應光寺の習字を物語る貴重な文化財であります。

なお、この鐘は昭和六十年十一月二十六日の火災により祝詞堂や天王堂とともに
焼失しましたが、寺の復興を願う関係者の浄財により平成二年に再建しました。

平成十二年三月

都幾川村教育委員会

国指定重要文化財

寛元三年銘

銅

鐘

一口

鎌倉時代・寛元三年（一二四五）
昭和二十五年八月二十九日指定

この鐘は、鎌倉時代の寛元三年（一二四五）五月十八日に榮朝が願主となって東国の名工「物部重光」が鑄造し、慈光寺に奉納した銅製の梵鐘です。鐘の表面（池の間）には陽鑄による銘文が次のようになっています。

池の間第一区銘文

「奉治鑄 六尺椎鐘一口

天台別院慈光寺

大勸進遍照金剛深堂

善知識入唐沙門妙空

大工物部重光

寛元三年己丑五月十八日辛酉

願主権律師法橋上人位榮朝」

池の間第四区銘文

「銅一千貳百斤」

この銘文によると、鎌倉時代に隆盛を極めていた慈光寺が「天台別院」であったこと。後に鎌倉大仏や鎌倉建長寺の梵鐘（国宝）の製作で知られた「物部重光」が鑄造したこと。臨濟禅を日本に伝えた榮西の弟子で、靈山院や群馬県尾島町世良田の長楽寺を開山した「榮朝」が願主として奉納したことがわかります。また、「銅一千貳百斤」（約七二〇キログラム）とあり、原料の使用量がわかります。

この鐘は総高一五〇センチ、口径八八センチで、重量は七〇九キログラムあります。年代のわかる梵鐘では埼玉県内最古であり、鎌倉時代から南北朝時代にかけて関東で活躍した物部姓鑄物師の研究や慈光寺の繁栄を物語る貴重な文化財であります。

なお、この鐘楼は昭和六十年十一月二十六日の火災により釈迦堂や蔵王堂とともに焼失しましたが、寺の復興を願う関係者の浄財により平成二年に再建しました。

平成十二年三月

都幾川村教育委員会













釈迦堂跡



釈迦堂跡

昭和六十年十一月二十六日に焼失した釈迦堂は、元禄八年（一六九五）に奥州津輕の行者、釈見性が諸國を勧化して回り、喜捨された淨財で再建したものである。近年の調査で碑口に「元禄八年当院四十世学頭前鎮釈見性法印」とあり、当寺歴代八十四世前鎮の代に、釈見性の勧進により建立されたことを確認することができた。

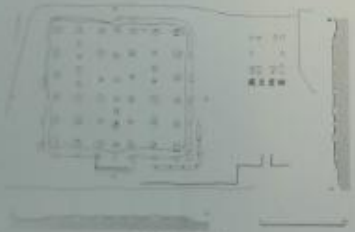
間口八間（十四・八メートル）奥行七・五間（十三・八メートル）さらに五尺（一・六五メートル）の外縁をもつ大講堂の内陣には、大講堂にふさわしく高さ二・二六メートルの巨大な釈迦如来坐像が安置されていた。獅子の丸柱に全高が残っていたことから往時は極彩色であったことがうかがえる。

「慈光寺実録」によると当山には学徒と行徒の二派があり、一夏九十日間行徒は四峰修行し、学徒はこの講堂に閉じこもり論議決釈修行を行った。寛元の鐘を鳴らしこの堂に全山の僧が集まり内陣は七十五坊の住職、中外陣には修行僧が坐して修行したと伝えられている。外陣の左右に安置されていた仁王像は、摩訶毘盧により明治末期まで山門にあったがここに移転奉祀されたものである。高さ三・五メートルの巨像で「慈光の仁王様」とよばれ地元人々から親しまれ「仁王奇行」と言う伝説も残されている。

なお、釈迦堂と共に釈迦如来坐像、仁王像、蔵王堂及び蔵王権現立像が焼失した。



平成十七年十二月



釈迦堂跡復元図

都賀川村教育委員会

釈迦堂跡

昭和六十年十一月二十六日に焼失した釈迦堂は、元禄八年（一六九五）に奥州津軽の行者、釈見性が諸国を勸化して回り、喜捨された浄財で再建したものである。近年の調査で鰯口に「元禄八年当院四十世学頭翁鎮釈見性法印」とあり、当寺歴代八十四世翁鎮の代に、釈見性の勸進により建立されたことを確認することができた。

間口八間（十四・八メートル）奥行七・五間（十三・八メートル）さらに五尺（一・六五メートル）の外縁をもつ大講堂の内陣には、大講堂にふさわしく高さ二・二六メートルの巨大な釈迦如来坐像が安置されていた。厨子の丸柱に金箔が残っていたことから往時は極彩色であったことがうかがえる。

「慈光寺実録」によると当山には学徒と行徒の二派があり、一夏九十日間行徒は回峰修行し、学徒はこの講堂に閉じこもり論談決択勤行を行った。寛元の鐘を鳴らしこの堂に全山の僧が集まり内陣は七十五坊の住職、中外陣には修行僧が坐して勤行したと伝えられている。外陣の左右に安置されていた仁王像は、廃仏毀釈により明治末期まで山門にあったがここに移転奉祀されたものである。高さ三・五メートルの巨像で「慈光の仁王様」とよばれ地元人々から親しまれ「仁王奇行」と言う伝説も残されている。

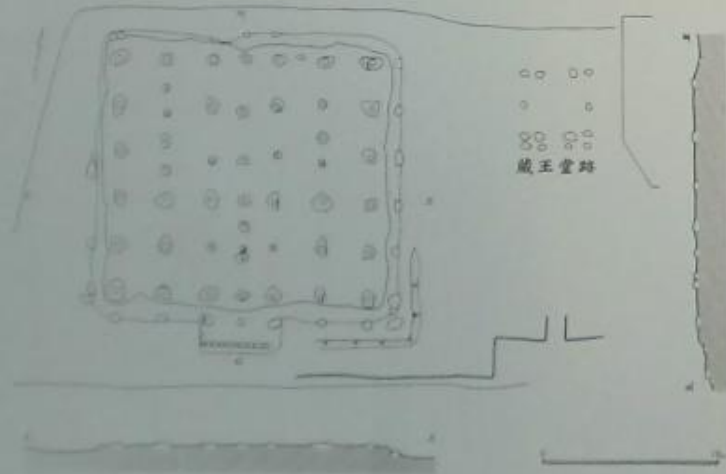
なお、釈迦堂と共に釈迦如来坐像、仁王像、蔵王堂及び蔵王権現立像が焼失した。

昭和60年に焼失した江戸時代再建の釈迦堂

平成十七年十二月



都幾川村教育委員会



釈迦堂跡実測図

釈迦堂跡



釈迦堂跡の遠方に開山塔の覆堂が見える



この中に慈光寺を開山した道忠の墓とした開山塔(国の重要文化財)が収められている



国指定重要文化財

慈光寺開山塔 一基

室町時代 天文二十五年（一五五六）
昭和二十八年八月二十九日 指定



慈光寺開山塔は、鑑真の弟子で慈光寺を開山した釈迦尊（じあそん）の墓に建てたと伝えられ、正面に見える覆堂の中に収められています。

現在の開山塔は、総高五・一〇メートルの比較的小型の木造宝塔で、室町時代末の天文二十五年（一五五六）の銘が露盤にあったという記録と建築技法により、この塔に建てられたものと考えられています。一階は八角形の土台に八本の円柱を建てて円筒状とし、上端に厚板の屋根、側面の四方に棧唐戸（唐）を設けています。二階は一階床から立て上げた円形の軸部（中心部）の上部に柱物を置き、方形の屋根を支えています。屋根は板で葺いた「とちまき」で勾配が急になっています。塔の先端にある相輪は欠損していましたが、昭和三十三年の解体修理により復元したものです。なお、この修理の際に、基壇の下から発露した人骨を納めた褐色器製の蔵骨器や埴り金具など（埼玉県指定文化財）が発見されています。

慈光寺開山塔は、独特の建築技法とともに国内唯一の室町時代の木造宝塔として、極めて貴重な存在であります。

平成十一年三月

都幾川村教育委員会

国指定重要文化財 慈光寺開山塔 一基

室町時代 天文二十五年(一五五六)
昭和二十八年八月二十九日 指定



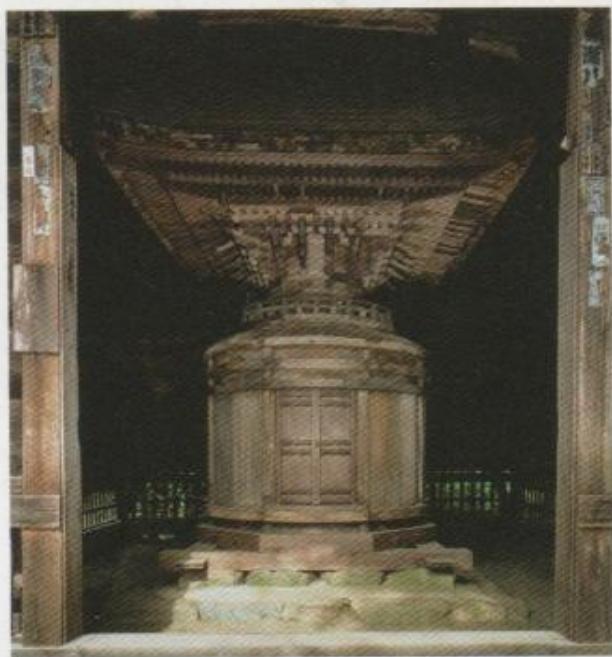
慈光寺開山塔は、鑑真の弟子で慈光寺を開山した釈道忠(広恵菩薩)の墓に建てたと伝えられ、正面に見える覆堂の中に収められています。

現在の開山塔は、総高五・一〇メートルの比較的小型の木造宝塔で、室町時代末の天文二十五年(一五五六)の銘が露盤にあったという記録と建築技法により、この頃に建てられたものと考えられています。一階は八角形の土台に八本の円柱を建てて円筒状とし、上端に厚板の亀腹、側面の四方に棧唐戸(扉)を設けています。二階は一階床から立て上げた円形の軸部(中心部)の上部に組物を置き、方形の屋根を支えています。屋根は板で葺いた「とち葺き」で勾配が急になっています。塔の先端にある相輪は欠損していましたが、昭和三十九年の解体修理により復元したものです。なお、この修理の際に、基壇の下から火葬した人骨を納めた須恵器製の蔵骨器や飾り金具など(埼玉県指定文化財)が発見されています。

慈光寺開山塔は、独特の建築技法とともに国内唯一の室町時代の木造宝塔として、極めて貴重な存在であります。

平成十一年三月

都幾川村教育委員会



◎ 開山塔 室町時代 慈光寺蔵

慈光寺の開山道忠のために建てられた塔で、一重宝塔の遺構は全国的にも類例が少なく貴重である。露盤に天文25年（1556）の銘があったと伝えられ、構造手法からも建立年代はその頃と推定される。







ここからの景色



前方はトイレ

